

光の支配

木塚康成

麦わら帽子が

へこんでいるのは

そこに 夏の重さがあるからだよ

一通の手紙のように

孤独のために

海を開こうとすると

水平線が空っぽの胸を

さあつと 切り裂いてゆく

風力発電のプロペラが

秒針のように

ゆっくり動きだし

風の畑で 光の発芽が始まった

波は 幼い足跡を

すべて消し去ろうとしているのに

海が まだ 光の支配を許しているから

誰も 海を眠らせることができない

空がほどけて

麦わら帽子の編み目から

青い光の螺旋が 幾筋も

揺籃のなかに吐き出される

青は 生まれたときにあの子が見た色

白い積雲がよじれながら

海泡石のように沸き上がってくる

あるいは 雪庇のように青からせり出してくる

ひと夏で

あの子よりも大きくなった向日葵は

蜂の巣穴のように種をぎっしりと孕んで

ゆさゆさと まばゆい方へのびてゆく

あの子は

筆洗の水が濁るのを見たくないのだ

だから 画板を放り出したまま

いつも 海を眺めている

うっかり踏みつぶした

インディゴブルーの絵の具が

一瞬で あたりを夜に変えた

椅子が 冷たい

秋が 降りてくる

ほら！

麦わら帽子のへこみを

指で押し戻してやると

そこに もう 夏はいなくなるよ

女の子が

夜の舗道にしゃがみ込んでいます

白いチョークの輪のなかは

秋なのだといいます

そういえば

光が 少し 冷えてきました